巻頭言

2013年初夢
―森林資源管理への新たな展開―

アジア航測(株)代表取締役会長　大 槻 幸一郎

新しい年が始まった。辰年の昨年は、森林・林業再生の歳として「辰」に相応しく勇ましい号令はかかったものの、ヒノキ材価格の暴落など市場経済の非情さを痛感させられた。また、政治不安や景気低迷に加えて、集中豪雨等の自然災害やトンネル崩落事故、殺伐な社会事件など暗い話題には事欠かない一年であった。しかし今年は、安定した政治に期待しつつ「「蛇」（歳）がゆえに実現できた」との嬉しくなるようなエポックを林業関係者と共有したいものだ。

昨年末に、国際セミナー「森林を測り、知る～森林に関する国際的報告の現状と課題～」に参加する機会を得た。FAOやITTO等の国際機関の関心事は森林情報の精度・確かさであり、しかも国連気候変動枠組み条約や生物多様性条約に加盟している国家として森林面積や資源量に加えて、水土保全機能、生物多様性、ガバナンス等時代のニーズの変化に合わせた森林資源の現状と動態変化の計測の重要性が報告された。これに対し、我が国の実態は如何なるものであろうか。

我々が国有林の実務に着いた昭和45年頃は、営林局計画課の職員が年間3ヶ月ほどの長期出張により、資源調査や施業方針の検討のために現地に入ったものである。これでも以前の調査期間に比べて大幅に短くなったのでは有るが、調査精度の確保に威力を発揮したのが航空写真で、現地に入る前に立体視の仕方や、樹種判読、蓄積の比較目測手法等、森林判読の基本的技術の研修を少なからず行っていたものである。

今日の現状は如何であろうか。言うまでもなく、行革の嵐の中で、国・都道府県の森林関係職員の採用は大幅に減らされ、予算も削減される中で写真撮影もままならぬ所もあると聞き、森林計画の基礎となる森林現況調査の実態は、かなりお寒いものと推測している。

森林簿（森林調査簿）なる森林現況を記した台帳が古くから整理されて来てはいるが、これが森林売買や間伐等の保育を実施する際の資源現況として利用されようとすると、関係者の弁は一様に「あの簿冊はあてにするな！」の一口である。

加えて、森林所有者の高齢化や不在村化等の中で民有林の森林所有界が明確でない事が重なると、森林の現況とは一体何なのかが全く解らなくなるのが実態である。

今から30年ほど前に、国有林改革との関連で隣接する民有林の境界画定が論議になった事があった。森林所有者が年々高齢化し、村外に出て連絡が取れなくなったら、誰の山かが分からなくなるという危機意識があり、そんな民有林の山を国有林野事業として受託管理してはどうかとの発想からの論議であった。所有界を確定するために所有者の立会いを求め、立会いの連絡が無い場合には一定の要件が整ったら当該森林の公有化、もしくは共有林野化をするという考えで制度化の骨子をまとめていた。しかし内閣法制局等での事前相談では、財産権の制約は出来ないとの事。過去にも同様のチャレンジがなされていた中での再チャレンジであったので、改めて個人財産の権利の重さ、壁の厚さを認識したが、「これでは日本の森林はだめになる」との悔しい思い出が残っている。

そして、昨今取り上げられている水源林の外国人支配への警鐘である。土地制度の不備から、森林所有の変化等の実態把握が不備なため、ある日

突然のように水源涵養に重要な森林が外国資本に押さえられかねないと指摘している。

地球規模での環境問題の解決が国家の一つの使命である今日、国土の7割をも占める森林が、産業振興や環境保全上の重要な役割を担う等、多様な機能発揮が求められている中、より多様で、高度な森林資源の把握が求められており、この際、技術や制度的分野での思い切った政策を打ち出す時期がやってきたように思える。

まずは森林資源の現況把握である。

航空レーザによる、森林資源の現況把握の技術的進歩は著しい。かつての空中写真の2次元アナログ情報から、レーザデータの3次元デジタル情報に変化することで樹種、樹高、蓄積などの林況に加えて、地形、路網配置などの地況もかなり機械的な手法で、一定の精度を確保した中で把握されるようになった。また、データの定期的な把握で時間差による森林の変化（資源成長量、林地崩壊量、河川土砂堆積・移動量等）が経年的に押さえられるようになる。加えて、取得される各種情報がデジタルである事から、森林GISに取り込まれる情報の入力がこれまでよりも大幅にスピードアップすることになる。川上の森林資源の把握から、川下の木材加工の世界までを繋ぎ得る森林GISの高度利用こそが産業再生の鍵であると考えると、レーザデータによる、森林のデジタル情報化の意義は大きい。

この様にレーザデータの利便性は高いのであるが、我らアナログ時代の人間からは一抹の不安がある。航空写真の活用時代には密着か2.5伸ばしの航空写真を目の前に置くことで、自分自身の「手と目と足」で、森林の現況がイメージ化できたのであるが、レーザデータは無機物である物言わぬサーバーの中に保管されている。これに必要な加工処理を民間会社が行い、アナログ化して利用者に提供するという手順を一般的には踏む。レーザ撮影と同時に行われる光学撮影の写真がアナログ人間には安心材料ではあるが、物言わぬデジタル情報をいかに活用するか、利用者の意思で随時必要な情報を引き出す為の「からくり箱」としての森林GISの役割が高まって来ている。

この様なレーザデータの取得を、森林のみならず国土全域を定期的に行い、取得データの精度管理、保管・利用の仕組み等に公的関与も加えて、世界の最先端を行く国家資源管理の仕組みを森林分野から先ず打ち立てる夢を実現したいものである。

一方、森林境界確定のスピードアップも求められる。既に確定している国有林境界の効率的な管理のために、電波発信器付のチップを境界標識に埋め込む等のアイディアの実現は間もなくと考えられる。また民有林の境界画定は「平成検地」の名称で号令はかかっている。課題として公図と現況の整合性の調整等が技術的分野にはあるが、レーザデータの活用やGPS利用の中で所有者の理解・合意が得られれば解決できる話である。

最大の課題は、所有者不明の森林の扱いであろう。不明者を何時までも探し回っていては時間だけが経ってしまう。相続概念さえ失っている、子や孫の時代まで問題を先送りしては国土の管理、ましてや国家の危機管理は宙に浮いたものになってしまう。先に述べたような過去の試みである森林の公有化や共有林化については、時代背景の変化（森林所有者の不明の急増や外国資本の増加など）を根拠に再度法制化を試みるべきではないか。

「蛇」の様に、しつこく・ねちっこく一見陰険に思われても諦めないでターゲットを狙い、飛び掛ってこそ森林・林業の再生は実現できるのではないだろうか。

環境トップランナー企業
ECO FIRST
「エコ・ファースト企業」
認定取得
アジア航測 エコキャラクター
えこいちろうくん
アジア航測株式会社
http://www.ajiko.co.jp

大槻会長とアジア航測株式会社キャラクター

環境トップランナー企業

「エコ・ファースト企業」
認定取得

アジア航測 エコ キャラクター
えこいちろうくん

アジア航測株式会社
http://www.ajiko.co.jp